

令和6年度 京都府立井手やまぶき支援学校 学校経営計画(スクールマネジメントプラン) (評価)

学校経営方針		前年度の成果と課題	本年度の学校経営の重点(短期目標/概ね1年間)		
<p>【教育理念】 地域と共に歩む学校 【校 是】 光輝 地域(まち)を照らせ 【学校教育目標】 みがく むすぶ きりひらく 【目指す人間像】 よりよい社会と 幸福な人生を創り出せる人 【経営方針】 中期経営方針(開校概ね3年間) ◇教育目標実現のために、開校後の第一期、三年間において、地域関係者・保護者に、教育実践・教育課程を理解いただきながら同時に、教育実践・教育課程づくりへの連携協働を進め、「井手やまぶき支援学校」がこの地域にあって良かった」という思いをもっていただけるように、あらゆる分野において精励する学校経営を実施する。そのために、学校予算の合理的かつ効果的な執行を実施する。 基盤となる課題・重点課題(「アクション7&lt;セブン&gt;)を制定する。</p>		<p>昨年度は、三菱みらい育成財団の助成を受け、様々な外部専門家を招聘して、最先端の知見を学ぶことができた。学んだことを教育実践に生かすと共に、保護者・地域関係者に取組を理解いただくために発信や学校公開のさらなる工夫を行う。今年度は開校第1期のまとめとして『12年間をつなぐ主体的・対話的で深い学び』をキーワードに『むすびカリキュラム(むすびスタディ・学部混合むすびスタディ)』を確立させ、全国公開研究会を実施する。3年間の到達点を踏まえ、保護者・地域関係者から信頼され、「井手やまぶき支援学校がこの地域にあって良かった」という思いを持っていただけるような学校づくりを一層推進する。 ・生涯学習の基礎基盤を目指したCS(コミュニティースクール)との連携である『ISCC(IdeSportsCultureClub/スポーツ・文化を楽しむ日)』や『こまちサロン』では、地域の諸団体・サークルに参画していただき、地域の方々と触れ合いながら豊かな体験型学習を展開していただくことができた。ISCCでは、実施日を部活動日と重ねることで、参加者を増やすことができた。より地域に根差した取組となるように展開していきたい。 ・地域の方に支えていただく一方で、地域への貢献として高等部を中心とした清掃活動等を行うことができた。今後も地域貢献活動を展開し、『地域と共に歩む学校』を目指していく。 ・教職員の働き方では、昨年度月45時間以上の超過勤務者が月平均22名を超えていたが、今年度は大きく減らすことができた。引き続き業務の改善や分担等による業務時間の平準化を図る。働き方改革は、全ての教職員が自分事として捉え、学校全体で推進する。はつらつさそうとした働き方は教育効果を上げることにつながるとの考えのもと追求していきたい。また、『みがく・むすぶ・きりひらく』教職員として児童生徒の模範となるよう、コンプライアンス意識をさらに高める。</p>	<p>井手やまぶきアクション7(セブン)開校3ヶ年計画うち3年目 【基盤となる課題】 アクション1 教職員の専門性確保と本校第2期への継承、「学ぶ・働く」を支える環境条件づくりと教職員の学びが子どもを育てるという意識の醸成 研究、OJT、外部専門家、働き方改革プロジェクト アクション2 多様な専門性を持つ教職員の、それぞれの専門性を生かした連携と協働。地域関係者・保護者・卒業生並びにその家庭との連携と協働 学校経理、施設・設備、情報の管理、情報の公開、危機管理、医療的ケア、学校運営協議会(コミュニティースクール)、PTA、YS(やまぶきサポーター)、YB(やまぶきボランティア)、外部専門家、教育後援会等、インクルーシブ教育システムづくり 【重点課題】 アクション3 どのような時代であっても必要な資質・能力の育成 教科指導、授業改善「主体的・対話的で深い学び」(個別最適化学びと協働的な学びの一体的な推進)の追求、教育課程、カリキュラム・マネジメント、(GIGAスクール)ICT 等 むすびカリキュラム、(3年目公開研究会) アクション4 生涯に及ぶ、生きる力の育成のための基礎づくり 読書活動、生涯スポーツ・学習、ISCC(IdeSportsCultureClub/スポーツ・文化を楽しむ日)、交流及び共同学習 アクション5 大人に向けた健やかなからだ、豊かな心の育成 保健指導、安全教育、性教育、主権者教育、生徒指導、教育相談、特別活動、いじめ 等 アクション6 自立と社会参加を実現し、幸福な人生とよりよい社会づくりを目指す力の育成、高等部コース制確立 進路指導、キャリア発達、等 アクション7 早期支援重視し、切れ目なくつなげる地域支援推進、地域関係者・保護者との連携と協働 井手やまぶき相談・支援センターのみならず全校による地域支援</p>		
評価領域	重点目標	具体的方策/目標値	評価部門	総合	成果と課題
アクション1 教職員の学びが子どもを育てる環境条件への意識と、醸	【研究】 ・全校研究主題の実践研究推進 ・実践発表会を行う	①外部専門家の助言や「みがく授業者サポート」から自らの実践を振り返る機会を持ち、授業改善を行う。(全担任実施) ②三菱みらい育成財団研究プロジェクトを立ち上げ、開校第1期のまとめとして公開研究会：11月29日(金)を行う。	◎		①全学級担任がみがく授業者サポート会議を実施(100回)。会議設定時間の捻出が課題であるが、スマートな授業改善により質の高い授業を展開した。「むすびスタディ」は星稜大学柳川講師よりキャリア教育につながる大切な取組との高い評価を受けた。 ②文部科学省官野視学官を招聘し、きりひらく公開研究会を実施。(参加者64名)
	【OJT】 ・教育公務員として府民に信頼される教育活動を基盤とし、児童生徒の規範となる誇りある行動実践に努める。 ・学校組織としての人材育成体制の整備	①体罰や不適切指導、職員間のハラスメントの根絶等、人権意識と社会人・教育公務員としての自覚と行動実践、コンプライアンスの向上につながる研修や実態調査(7月期)の実施(不適切事象0) ②教育理念・学校教育目標の理解と学校経営目標を意識した教育活動の追求。中間期、総括期にアンケートにて振り返り達成度を確認する。 ③教職員キャリアステージの指標の意識化とステージ別研修の実施 ④専門組織が提供する研修動画等による自己研鑽(ナビゼミ、NISE 学びラボ、NITS オンライン講座等の受講1人月1回以上) ⑤初任者及び転入教職員・講師対象の校内研修の充実 ⑥教職員ハンドブック、学校施設管理マニュアル、文書マニュアル等の周知、活用、次年度に向けた見直し	◎		①③京都府の人権教育について再確認を行うとともに、「ステージ別研修」においてキャリアステージを意識した教職員悉皆研修「人権研修」を実施。また、ハラスメントアンケートと自己点検により、NOハラスメントの意識を高める標語を決定。ハラスメント月間(9月)を設定し、併せて面談を実施し、ハラスメント0につなげた。 ②SMPの評価において教育目標にそった教職員の意識としては、90%が「できた」と回答。第2期に向けて「むすぶ」を重視した教育活動を展開する。 ④教職員対象の月1回ナビゼミ(オンラインビデオ研修)65%程度の視聴率。業務関係から数本のビデオをまとめ視聴(年間12本)する場合もある。今後月1回の悉皆研修としての位置づけを再確認する必要がある。(経営企画室用コンテンツの拡充) ⑤初任者研修等の確実な実施。コラボによる教職員悉皆全体研修を実施。(初任者の企業探検により、企業におけるマネジメントについて詳しく学ぶ機会や経営企画室の業務研修等の多様な視点から学べる研修等) ⑥第2期に向けた教職員ハンドブックの改訂を実施。各種マニュアルの周知徹底を図るシステム及び内容の精選。
	【働き方改革プロジェクト】 ・ライフワークバランスを踏まえた安全で魅力ある職場環境の創出 ・愛校精神の基盤となるように清潔で美しい学校環境を築く。	①『やまぶきスマートプロジェクト』に基づく快適な職場環境の整備、リフレッシュの機会の充実、クリアデスク、ペーパレス化、NO残業デーの実施(月2日)、19時退勤2週間(各学期に1回)、月1時間からのリフレッシュ年休の推奨 ②働き方改革は教職員一人一人が自分事と捉え全員で推進するが、働き方改革推進委員会・衛生委員会・管理職・各分掌部長・学年コース長を牽引者とする。 ③会議の所要時間の短縮に努める。(目安45分以内) ④時間外勤務状況を月の中間時点で提供することで、自己調整する。 ⑤業務時間の平準化(役職者の校務分担改善、担当管理職と業務内容・分担の相談、教員業務支援員の活用、年休取得の推奨、組織の視点等の意識改革)(時間外勤務月45H超教職員0人)	◎		①②NO残業(17時半完全退勤)・2WEEK19時退勤の実施。「やまぶきスマートプログラム」の牽引者として20名程度の教職員が挙げられた。(牽引者の特徴:ICT活用、業務の手際の良さ、スマートな業務遂行)ICT活用は働き方改革には必須であるため、業務のIT化を積極的に導入。学年長・グループ長の業務過多の改善及び業務の平準化に向け、教務部における業務の見える化を考案中。 ③④会議時間45分の意識化を図るとともに、時間外勤務状況を月の中間時点で提供をする中で、タイムマネジメントや業務改善への意識が高まり、時間外勤務が平均月4時間減(昨年度比)となった。 ⑤業務の平準化を目指し、時間外勤務45時間以上者は、業務見直し・振り分け及びタイムマネジメント等の指導を行った。年休取得の推奨については、意識を高めるまでにとどまった。
アクション2 地域関係者・保護者・卒業生並働にその専門性を生かした連携と協働	【チーム学校】 ・質の高い教育活動を支える経営企画機能の充実	①多様な専門性を有するスタッフや外部専門家と教職員が自らの専門性を十分に発揮し、「チーム学校」としての総合力、教育力を最大化できる体制の構築 ②経営企画室と職員室の連携と情報共有による確実な業務遂行	○		①教員の88%が、外部専門家等とともに授業づくりを進めることができたとの回答。また、学年長・コース長等の組織運営をするメンバーについては97%が連携した指導や授業づくりができたとの回答し、チーム学校としての教育力を最大限に発揮できた。 ②学校経理や会計に関わり、95%の教員が経営企画室との連携のもと、適切な経費執行を行うことができたとの回答した。
	【学校経理】	①学校経営計画の具体化に向けた合理的・効果的な予算執行を学校経営会議で予算状況の開示による節減 ②整理整頓されたきれいな教育環境の維持管理に努める。(教室・廊下、掲示板の整備・活用、花壇・植込み・農場の美化・道具の管理)	◎		①予算執行状況の確認や経費節減等の方策を検討するための学校経営会議を実施し、三菱みらい育成財団助成の有効活用及び経費削減のアイデア等を共有した。また、第2期にむけた企画提案について協議することができた。 ②非常勤事務職員における定期的な職員室清掃による環境美化の維持及びYS・農園芸担当による校内環境美化を推進を図った。 ③「アートギャラリー(学校美術館)」を開館。京都新聞に掲載。才能の開花を目指した取組として年間指導計画に組み込む予定。 ④府立学校体育施設開放事業の実施なし
	【施設の管理、情報公開】	①個人情報保護と紛失事故防止、クリアデスクの徹底 ②HPIによる情報発信の活発化(各学部毎日発信) ③新聞社への広報(掲載1回/月)、教育雑誌への情報提供・掲載(2投稿)	○		①個人情報紛失事象0件、iPadの置き忘れ、メール誤送信等のインシデントにつながる事象有(解決済み) ②各学部毎日情報発信及びお便りや広報ニュース。学校/給食Instagramスタート(フォロワー数300/100) ③新聞社報道(10件)・TV放映(2件)、教育雑誌への掲載(5件)
	【危機管理】 ・学校安全会議の計画的な運営による安全・安心な安全管理体制の構築 【医療的ケア】	①感染予防・感染拡大防止等対応の徹底 ②地域との災害時相互協力関係をPTA防災部と連携をしながら推進する。 ③『普通救命技師認定証』を保有する教職員(現有+10%以上) ④医療的ケア安全委員会を中心とした研修を計画的に行うと共に、医療的ケアに関するヒヤリハット事象及びインシデント・アクシデント情報の周知と事故発生防止の徹底 ⑤個別の緊急対応訓練の実施(各学部3回以上) ⑥あらゆる危機に対して、早期対応と情報共有、組織対応の徹底	◎		①感染症による学級閉鎖(0件)感染症拡大防止のための週1回の校内消毒作業実施及び加湿器・サーキュレータの設置 ②PTA防災部による備蓄品の入れ替え作業の実施及び井手町消防署と連携した施設設備の点検。 ③「普通救命技能認定証」の積極的な取得の推奨が必要。 ④医療的ケア安全委員会を中心とした計画的な研修の実施及びヒヤリハット事象のスマートな収集方法の模索。アドバイザーによる相談会を実施。人工呼吸器等を医療的ケアの必要性のある児童の命を守る指導支援の在り方について改善を図る。 ⑤全学部コース・グループにおける個別の緊急対応訓練の実施 ⑥緊急搬送等の事象(5回)に、適切な組織的対応をすることができた。
	【保護者・地域との連携・協働】 ・地域での生涯学習の基盤作りとして、地域と共に歩む学校づくりに向けた推進体制を構築 ・学校運営協議会(コミュニティースクール)、PTA、教育後援会との連携・協働	①学校公開(年5回)来校者(年900名以上)、やまぶき祭来校者(200名以上) ②学校評価保護者アンケートの回収率(90%以上) ③PTA(YS)、地域ボランティア(YB)による応援組織の構築(年延べ150名) ④PTA本部役員会への学年・コース長の参加と協働 ⑤PTAとCSの連携、CSの下部組織の始動、ISCCの支援体制の検討 ⑥地域住民の参画による豊かな体験的学習の充実(こまちサロン20回以上等) ⑦教育後援会の支援のもと、教育環境の充実	○		①②学校公開来校者(993名)92%の保護者が来校。学校評価アンケート90%以上の回収。97%の保護者が自信や意欲を育くむためのキャリア教育を推進していると回答。また、95%が児童生徒の力を伸ばすための授業の充実や工夫がされていると回答。 ③⑥YS232名(保護者総数32%が参加)、YB50名のボランティアによる応援体制を構築した。YBに関しては、こまちサロンにおいて豊かな文化・音楽と触れ合う機会として子どもたちに還元された。 ④PTAとの共同による取組を展開するために、学年長やコース長との連携を今後図っていく。 ⑤73%の保護者がCSの取組を理解。今後は、地域住民等と力を合わせて学校の運営について発信する。 ⑦教育後援会に(会員数38名7団体が加入。会費の活用と毎年納入にむけた広報による会員数の拡大を図る。
	【インクルーシブ教育システム】 ・インクルーシブ教育の構築を目指した、交流及び共同学習の実施	①小学部居住地校交流の実施、直接交流だけでなく様々な交流形式を追究(60%以上) ②交流及び共同学習等の実施 ③地域貢献活動等地域との多様な取組の実施 ④地域へ図書ラウンジの本の貸し出し	○		①②小学部83%が居住地校交流を実施(対面・オンライン・紙面等)井手町居住児童生徒対象に井手小、泉ヶ丘中との交流及び共同学習を実施。「そばにいるのが当たり前」をキーワードに居住地交流のモデルに向けた取組を推進。 ②高等部によるテオテラス井手における販売活動や校区地域の清掃活動による地域貢献活動 ③YS・YBの図書貸し出し事業スタート

アクション3	どのような時代であっても必要	<p>【教科指導・授業改善・教育課程】 ・主体的・対話的で深い学び(個別最適な学びと協働的な学びの追究)、授業改善 ・教育目標に基づく授業実践と地域資源を活用した授業の実施</p> <p>【カリキュラム・マネジメント】 ・継続的・発展的な授業改善の推進 ・重層的・機能的な組織運営と教育指導に向けた組織マネジメント</p> <p>【GIGAスクール】 ・ICT機器を活用し、意思表示の手段や外部との関わりをもつことで、生活や学習に対する意欲及び自己表現力を育む。</p>	<p>①担任が行う自立活動の指導の充実と流れ図を使った実態把握から具体的な指導内容の設定 ②確かな学力の育成に向けて基礎基本的な知識・技能の確実な習得を図る教科別の指導の充実 ③主体的に取り組む意欲や自信、自己肯定感を育てる各教科等を合わせた指導の充実 ④各教科等横断的な視点を持った学習の実施 ⑤地域資源活用の取組を継続的に実施</p> <p>①学部間・教師間の連携、学びの連続性等、12年間を結び、『むすびカリキュラム』の展開 ②総括・教務部長会議と連携しながら各学部で教育課程を検討し、指導計画の改善に生かす。 ③学年・コース長のリーダーシップのもと、学年及びコース運営を効果的に行う。全校学部経営会議で目的等の共有を行う。 ④副学年・コース長を中心にフォローアップや教職員集団の同僚性を高める。 ⑤ベアクラスや学年・コースや自立活動推進担当等の教師集団がつながり、日常的に組織的な指導を行う。</p> <p>①タブレットを活用した授業等の実施(学期1人1単元以上) ②プログラミング研修会を実施し、各学部の好事例を共有する。(3事例) ③ICT機器を活用した土浦特別支援学校(姉妹校)との遠隔交流(各学部2回以上)</p>	○ ◎ △	<p>①②③95%の保護者が学校は、児童生徒の力を伸ばすための授業の充実や工夫がされていると回答。教育内容を重視した教科別の学習及び各教科等を合わせた指導の見直しを構想。合わせて、適切な授業時間の設定や教科指導を進める。 ④横断的な視点をもった確実な教育内容の実施が課題。 ⑤地域資源を活用した教育活動の更なる発展による『地域と共に歩む学校』の具現化を図る。</p> <p>①②学部混合むすびスタディを実施し、キャリア教育につながる成果が児童生徒のエピソードや変容から見られた。総括・教務会議の定期的な実施において、「むすびカリキュラム」の成果を踏まえ、第2期にむすび教育課程の見直しを進めている。 ③④副学年(コース)長のフォローアップを含む、コース・学年長を中心にした組織的な運営及び指導を推進。副学年長が、主体的に学年(コース)長や他メンバーに働きかけ支援するシステムが整いつつある。 ⑤ベアクラスの機能的な運営や自立活動推進担当等との連携による指導など、組織的な指導が構築。人材育成部のステージ別研修や混合むすびスタディの効果から、他学部指導者との連携もある。</p> <p>①②タブレット活用による授業の定着(一人1台iPad配備:高個人用)。ICTミニミニ研修会により、タブレット活用の授業実践を共有。しかし、プログラミングによる3つの実践は難しく、エバンジェリスト等のICT熟練者の要請が必要。 ③土浦特別支援学校(姉妹校)との遠隔交流の実施(3年目交流)</p>
アクション4	生涯に及ぶための基盤作り	<p>【読書活動の充実】 ・府立特別支援学校の読書活動の牽引校として蔵書整備しつつ、読書活動が定着するように全校プログラムを展開する。</p> <p>【生涯スポーツ・生涯文化につながる学習の充実】 ・生涯にわたってスポーツ、芸術・文化活動に親しむ意欲や習慣を育てる指導の充実</p>	<p>①外部専門家を招き、YS(やまぶきサポーター)、YB(やまぶきボランティア)と協働し、図書環境を整備する。 ②読書月間や読書表彰式等による全校的な読書活動の推進(本の貸出 年5000冊以上 月1人3冊以上) ③府立図書館や町立図書館の活用及び団体貸し出しの積極導入(600冊) ④図書・新聞を活用した読書活動を組み入れた授業連携(学部5例以上) ⑤府立特別支援学校読書活動研究会を主催し、取組事例等を発信する。 ⑥蔵書計画による蔵書数3500冊以上(R6年度約2550冊スタート) ⑦「誰もが読書ができる学校図書館」を体現するべく、LLブックや布の絵本・さわる絵本、マルチメディアDAISY図書、電子書籍等を充実させる。 ⑧分類マークの意味理解を促し、分類マークを活用した図書活動の推進(分類マーク地図の作製等) ⑨読み聞かせの会(12回以上)、読書月間の実施(6月、2月)</p> <p>①CS(学校運営協議会/コミュニティスクール)と協働し、ISCC(IdeSportsCultureClub/スポーツ・文化を楽しむ日)を年4回実施する。(参加者150名以上) ②外部部活指導者による、専門的な指導のもと部活動の計画的な実施 ③府立特別支援学校スポーツ交流会大会等への計画的な参加</p>	◎ ◎	<p>①⑥赤木かん子アドバイザーを招聘し、YB対象の研修会を実施。またYS・YBを中心とした環境の整備を推進。(蔵書数3500冊) ②学校図書館等における読書バリアフリーコンソーシアム委員・びわこ学院大学教育福祉学部藤澤和子教授及び特別支援教育課松永指導主事を招聘した読書表彰式を実施。貸し出し数5535冊。(2月現在:小2682冊 中2126冊 高727冊 総数5535冊)府立特別支援学校の読書活動の牽引校としての自覚と誇りを持った指導を今後も展開。 ③井手町図書館との連携強化(学期毎200冊貸出。井手町学校図書館司書連携協議会への参画、井手町調べる学習コンクール受賞)公共図書館のから貸出(年間882冊) ④⑤日常的に図書ラウンジ本を活用した授業実践(小学部国語科・道徳教育教材・調べ学習等)の継続と児童生徒の変容事例5事例については読書活動研究会(トライアングル)にて報告 ⑦⑧バリアフリー図書の蔵書数の増加及び児童生徒自ら本を選択できる手がかりとなる分類マークの活用。(分類マーク地図に関しては作成途中)</p> <p>①年間4回ISCC179名の参加。(ボランティア40名) ②音楽部(関西京都今村組今村夏奈様)、屋外運動部(株式会社fun da mental安川知宏様)の外部講師を招聘した部活動を実施。 ③中・高等部の生徒(計15名)が特別支援学校スポーツ交流会に参加</p>
アクション5	大人に向けた健全な体	<p>【人権尊重の教育の推進】 ・人権を大切に教育の充実 ・適切な生徒指導と、事象の共有化</p> <p>【安全教育の推進】</p> <p>【保健指導・教育相談・特別活動】 ・安全・安心な保健体制の構築</p>	<p>①12年間を結んだ主権者教育や人権教育を計画的に行い、社会へつなげる指導を行う。 ②SCやSSWと連携し、指導事象を共有化する関係者会議等を行う。 ③心理面の支援に重点をおく教育相談体制の充実、高等部生(みらいデザインコース)及び希望者のSC面談を行い心の相談相手の認識を高める。 ④人権尊重の観点から児童生徒の適切な呼名(「さん・さん」呼び等)、校内・職員室内の言語環境の充実 ⑤アンケートによるいじめの未然防止と体罰・不適切な指導の禁止・根絶</p> <p>①各学部で安全教育を単元化し、計画的に進める。 ②児童生徒の防災頭巾(家庭準備)100%備える。 ③安全の日を設定し、防災・防犯・安全訓練を実施(月1回以上) ④施設安全/施設・設備利用に関する安全な利用方法の徹底(行方不明・けが等の防止、安全表示) ⑤通学安全/通学環境の整備(SB 発着体制、送迎車両対応、通学路点検) ⑥避難訓練/外部評価を活用した、より実際に則した訓練の実施</p> <p>①個に応じた安全でおいしい給食提供と楽しい給食タイムの実現 ②適切なアレルギー対応を行う為の教職員研修及び校内保健体制の構築 ③安心安全な医療的ケア制度の実施、並びに適正な医療的ケア体制の堅持</p>	○ ○ ○	<p>①教職員研修として、京都府の人権教育について改めて学ぶとともに、やまぶきステージ別研修において、「人権」をテーマに協議を深め、教職員の人権感覚を磨き・高める機会となった。 ②③必要に応じてSC及びSSWとのケース会議を開催するとともに、高等部みらいデザインコースにおいては、SCとのカウンセリングを実施した。 ④⑤児童生徒の人権を尊重する上での重要な視点としての呼称(さんさん呼び)の徹底及び教職員の言語環境の整備を図った。教職員全員アンケートにおいて、不適指導の芽を摘むとともに、いじめ・ハラスメント事象の根絶を図った。</p> <p>①②③安全の日の実施(毎月)による安全・防災の意識付けの強化を図り、防災頭巾保有100%を達成。 ④けが等の事象については、GWを活用した周知を図り、校内の安全管理を徹底した。けがにつながる環境については早急な改善を図った。 ⑤SBの安全運行に向け、キャビックとの連携を密に図るとともに、遅延等の連絡に関しては、早急な対応を心掛けた。 ⑥時間・日にち予告なしの避難訓練により、緊急時の避難体制等の見直しを図るとともに、医療的ケアの子どもたちの避難確認の連絡手段等を検討を図った。消防署の方からの外部評価と合わせて点呼方法のアドバイスをいただいた。</p> <p>①個に応じた多彩で、バラエティー豊かな給食の提供及び食意識の高まりを意識した取組を実施。給食月間の充実を図った。 ②アレルギー対応児童生徒について検査時の確認システムを導入。アレルギー実態に即した給食を提供した。 ③医療的ケア対策委員会の実施。アドバイザーを招聘した相談会を実施し、医療的ケアの見直し及び体制の再構築を図った。</p>
アクション6	自立、立の社会福祉会づくりを目標とする	<p>【進路指導・支援】 ・希望進路の実現と進路開拓</p> <p>【キャリア発達等】 ・児童生徒がライフステージを意識した、学習活動と学部ごとのゴールを明確にしたキャリア教育の推進</p>	<p>①高等部卒業後の社会参加を見据えた12年間を通じた進路学習及び保護者支援の充実 ②高等部コース制に連動させた実習先開拓と実習、校外実習(職場実習)を積極的に実施し、働くことへの意欲を高める。 ③進路情報の教職員への周知・学習の機会として校内研修等の実施や事業所や実習先へ見学する機会を設ける。</p> <p>①社会や人の役に立つ喜びを豊富に体験し、児童生徒の自己肯定感や意欲を育てる一貫性のあるキャリア教育の推進 ②自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、自己評価を行うとともに、主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につなぐキャリアパスポートの活用 ③高等部コース制の見直し(個々の生徒に即したコース選考等) ④高等部教員による実習先の新規開拓(一人一社以上)</p>	○ ○	<p>①保護者向け進路研修会の実施(年間7回)保護者のニーズに沿った研修会内容の検討が必要。 ②高等部におけるSCによる面談と未来につながる面談シートの活用による進路面談の連動により、より個々の実態に即した進路指導を進めることができた。また、積極的な実習先の開拓と校外実習の実施ができた。 ③教職員向け事業所訪問の実施を行った。</p> <p>①むすびスタディ及び学部混合むすびスタディがキャリア発達において効果があり、次学部の子どもたちとの関りが子どもたち自身がキャリアを考える機会となる。保護者の認知度は44%。キャリア教育の効果について発信する必要あり。 ②キャリアパスポートからこれまでの学びを振り返るとともに、次学年や次学部の友だちの姿と「なりたい自分」へのイメージを重ねた。また、「なりたい自分」におけた学びの場の柔軟な見直し(特別支援学級への転学)の提案をした。(小学部10名程度) ③みらいデザインコースの目標や教育目標を明確化し、入学選考基準の見直しを図った。 ④高等部教員による実習新規開拓(35件)を実施。(実習実施1件、実習受け入れ承諾4件、雇用0件)</p>
アクション7	早く地域支援を推進し	<p>【井手やまぶき相談・支援センターのみならず全校による地域支援】</p>	<p>①園や学校からの依頼に基づき早期から学びにくい子への支援を行い、子どもの肯定的な自己理解を積み上げる。 ②個別最適な学びにつながる個別相談の充実 ③市町教育委員会等との綿密な連携による、相談等の円滑な実施と、校区相談支援体制の整備に向けた支援の充実 ④地域の関係機関との連携を強化し、各学校の教育の情報共有により、障害のある児童生徒及びその保護者へのきめ細かな支援を行う。 ⑤校内地域巡回相談員の積極的活用</p>	○ ○	<p>①地域支援相談件数(幼保44件、小85件、中32件、高1件) ②なんでも相談会の立ち上げによる相談数の増加を個別相談ケースに関連させるための工夫から相談につながった。早期からの支援をキーワードに、OTを招聘した市町幼保小中学校向けの研修会を実施。 ③やまぶき特別支援教育研究協議会を開催。市町教育委員会と合わせて、高等学校との連携を図る機会となった。また、学校公開やきりひらく公開研究会等において、本校の授業や取組等を知っていただく機会とした。 ④地域支援センターロゴによる広報活動を展開し、障害のある児童生徒へのあたたかな支援を意識したロゴとして、今後も発信する。 ⑤校内地域巡回相談員として15名の指導者が地域支援に従事。校内へ指導支援のコツを発信。</p>

学校関係者評価委員会による評価 【保護者・地域との連携・協働】や【生涯スポーツ・生涯文化につながる学習の充実】に関しては、より活発な活動がなされており評価されることである。また、外部資金を獲得し公開研究会を実施するなど、実践研究や授業改善に積極的に取り組んでおり、これらの取り組みは非常に意義深いものであると考えられる。また、進路指導・支援やキャリア発達について、本校の特徴的な取り組みである「むすびスタディ」を活かしながらさらなる充実が期待されることである。

次年度に向けた改善の方向性 社会のDX化を見据え、ICTを活用した授業実践を進めるとともに、子ども自身が主体的にデジタル活用する力を育む教育について考える。第2期「むすび」をキーワードに、インクルーシブ教育を踏まえた井手町立小中学校との交流及び共同学習を進展させるとともに、地域振興を担う学校として、「アートギャラリー(学校美術館)」等を活用して、より地域とむすんだ教育活動を展開する。そのために本校の特色である「むすびスタディ」を軸とした学びや障害による困難を改善克服するために必要な力を育む自立活動の指導を充実する。